

## 演出ノート

### 〈フィクションのインフラ〉としての劇場

『サテライト・コール・シアター』は、“聞き逃されてきた声”を受け取るための劇場装置です。

ここでの劇場は、完成された上演を見せるための“箱”ではなく、

一時的に“役”を引き受けることが許される〈フィクションのインフラ〉として構想されています。

そのフィクションの中に入ることで、人は現実を少しだけ演じなおすことができるかもしれません。

古代ギリシャのディオニソス祭では、普段は語られなかった感情や思想が、演劇というかたちで公に表されていました。

直接政治や社会に声を届けられないとしても、台詞という“フィクション”を通じて「あーだこーだ」と語ることができる。

この「言ってしまう仕組み」こそが、演劇の起源とも言われています。

フィクションという担保のもとでなら、人は本当の気持ちを言えることがある。

この劇場が、行き場を失い彷徨っている物語を受けとめる場所となり、

ケアという営みを抱える東京という都市が、「スマート・シティ」から「ケアリング・シティ」へと変容していくきっかけとなることを願っています。

### 家のなかの創造性に、光をあてる

この作品で語られるのは、「家」でのケアにまつわる物語です。

私は、子育てや介護に携わる人たちの営みが、想像以上に専門的で、そして驚くほど創造的であることに気づかされてきました。

その発見から、彼女ら／彼らと一緒に作品をつくりたいと思い、全国から語り手を募集しました。

参加してくれた12名の語り手を、私たちは〈ホーム・ケアリスト〉と呼んでいます。

この言葉には、家庭内ケアに関わる人々の専門性と尊厳が、社会の中でも正當に評価されるように、という願いが込められています。

家庭でのケアは、一つひとつの家や関係性に応じて生まれる、個別の選択と工夫に満ちています。

マニュアルに書かれていなくても、そこには現場でしか得られない知恵と、状況に応じて編み出される創造力が息づいています。

けれどその一方で、家庭内のケアは“当たり前”とされ、特別視も評価もされにくいのが現実です。

何より、当事者自身がそれを「当然のこと」として引き受けてきた背景があります。

このプロジェクトでは、そんな静かで見えにくい営みに光をあてることを目指しました。

語ること、聴くことを通じて、その複雑さや創造性を社会に開いていく試みです。

### “創作”の再定義としての対話と協働

この作品は、演出家がひとりで「つくる」ものではありません。

12名のホーム・ケアリストと、5名のナラティブパートナーが、時間をかけて対話を重ね、関係を育みながら、共同で創作していきました。

ナラティブパートナーは、語り手の物語を“引き出す”存在ではありません。

彼女ら／彼らは、迷いや揺れの中に寄り添い、ともにいる伴走者です。

そうした協働を通じて、ケアリストたちは、これまで気づいていなかった感情や、自分でも知らなかった自分自身に出会ったかもしれません。

「自分という存在が、球体ではなく、多面体であると気づく時間」。

この営みそのものが、語り手にとっての“ケア”にもなったのではないかと感じています。

私たちがもっとも大切にしたのは、「創作を通じて、誰かの現実が少しだけ動き出す余白」を残すこと。

このプロジェクトが“成果物”として評価されるよりも、関わった人たちが「参加してよかった」と思えることの方が、ずっと大切だと考えました。

完成されたかたちを目指すのではなく、創作そのものが「ケアすること／されること」と重なりながら進んでいく――。

ここにあるのは、誰かと関わり、耳を傾け、想像しようとした、ささやかな痕跡の集積です。

---

### 企画・演出 竹中香子 / Kyoko TAKENAKA

一般社団法人ハイドロプラスト プロデューサー・俳優・演劇教育

2011年に渡仏。日本人としてはじめてフランスの国立高等演劇学校の俳優セクションに合格し、2016年、フランス俳優国家資格を取得。

パリを拠点に、フランス国立劇場を中心に多数の舞台に出演。俳優活動のほか、創作現場におけるハラスメント問題に関するレクチャーやWSを行う。

2021年、フランス演劇教育者国家資格を取得。2021年以降、太田信吾監督作品すべての映画プロデュースを行う。2024年初戯曲を執筆し、『ケアと演技』を上演。

「演技を、自己表現のためだけでなく、他者を想像するためのツールとして扱うこと」をモットーに、アートプロジェクトを企画している。

## 今後の予定

### 一般社団法人ハイドロブラスト

2025年7月

映画『沼影市民プール』  
ニュージールランド Doc Edge にて世界初演／全国ロードショー予定！  
(近日情報解禁)

2025年8月10日～12日

映画『沼影市民プール』地元特別先行上映 @OttO (さいたま市・大宮)

2025年秋

『ケアと演技』大阪・長野・神奈川3都市ツアー  
『最後の芸者たち リクリエーション版』愛知・豊岡・インドネシア4都市ツアー

『ケアと清掃展 2025』

9月18日～9月21日 @日の出湯はなれ さいさん路地 長屋

\*路地裏へようこそ 2025 参加企画

10月7日～10月12日

@花長屋 (墨田区) \*すみだ向島 EXPO2025 参加企画

2026年2月

2025年度 Dance Base Yokohama (DaBY)

レジデンスプログラム『子宮内膜チョコレート』

制作進行中

映画『煙突清掃人』| 監督: 太田信吾、プロデューサー: 竹中香子

\*隅田川 森羅万象 墨に夢 (通称: すみゆめ) プロジェクト (2024年度、2025年度)

\*Japan Creator Support Fund フィルム・フロンティア支援企画

### うちはし華英

この夏は、短編小説の執筆を計画。

9月からドイツ・ベルリンのミックス・アビリティの劇団 Thikwa にて、  
即興演奏のワークショップを定期開催し、ベルリン即興演奏家との競演を図るフェスティバル  
(2026年6月) のアーティストティック・ダイレクターを務めます。

### 田村かのこ

2025年9月10日、24日

APK STUDIES ラーニングプログラム第1期「コミュニケーションを考える」 @TODA  
BUILDING 3F APK ROOM

### 萩原雄太

2025年8月

ガザ・モノローグ<伝言ダイヤル ver.> | 演出 @アートセンター NEW

2025年12月

Nanjing Project vol.6 | 構成・演出 @ST スポット横浜

### 南野詩恵

2025年8月16日、8月17日

プレイ! シアター in Summer 2025 オープンデイ「むくむくあそびば」

@ロームシアター京都 ノースホール

### 中村友美

2025年7月21日～2025年7月27日

KAAT キッズ・プログラム 2025「わたしたちをつなぐたび」| 美術

@KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ

## 関連イベント情報

予約・詳細は、BUG の Peatix にてご確認ください。

### ●「サテライト・コール・シアター 一気上演」\* 各回約 60 分

7月7日 (月) 14:30 / 12日 (土) 17:30 / 13日 (日) 14:00 /

18日 (金) 17:30 / 19日 (土) 17:30 / 20日 (日) 14:00 /

21日 (月) 14:00 / 21日 (月) 17:30

### ●「コミュニケーションデザイン実践ワークショップ

～安心と挑戦を両立させる場づくりの練習～

2025年7月5日 (土) 18:00-20:00

講師: 田村かのこ (アートトランスレーター)

### ●トークイベント「“いまだ語られなかった物語”を聴く～ナラティブ・アプローチって何?～」

2025年7月11日 (金) 19:00-20:30

登壇: 野口裕二 (東京芸芸大学名誉教授) 聞き手: 竹中香子 (本展企画者)

### ●「ホーム・ケアリストたちの話に耳を傾け続けた5名のナラティブパートナーによる座談会

～聞くこと/聴くこと/訊くこと、そして、誰かを想像すること。～

2025年7月15日 (火) 19:30-21:30

登壇: うちはし華英、佐々木将史、田村かのこ、萩原雄太、南野詩恵

イベント詳細はこちら



アートワーカー (企画者) 向けプログラム「CRAWL」選出企画

## サテライト・コール・シアター

企画・演出: 竹中香子

ホーム・ケアリスト (出演・テキスト):

内、ばおびーちゃん、佐々木義彦、重田拓成、愉美、よーよー、杉浦一基、ゆめ、nao tanigaki、南雲由子、ともよ、むさし

ナラティブパートナー: うちはし華英、佐々木将史、田村かのこ、萩原雄太、南野詩恵

セノグラファー: 中村友美

制作・企画補佐: 佐藤瞳

プロデュース相談: 武田知也 (bench)

演出相談/会場動画・インタビュー撮影: 太田信吾 (hydroblast)

運営: 片野可那恵、檜山真有 (BUG)

会場掲出物制作: 堀田ゆうか (BUG)

広報: 野瀬明子 (BUG)

告知物デザイン: 芝野健太

翻訳: 植田悠、リリアン・キャンライト、鈴木梨穂

会場撮影 (スチール): 加藤甫

会場設営・什器制作: 中村友美、本郷剛史、椎橋蘭奈、濱崎賢二、澁澤萌、深海哲哉、合同会社 Carps

主催: BUG (株式会社リクルートホールディングス)

共催・制作: 一般社団法人ハイドロブラスト

制作協力: 一般社団法人ベンチ

機材協力: Ozone 合同会社



## ナラティブパートナーによる「ナラティブパートナー」

ナラティブパートナーとしての、モニターの向こうで思想するホーム・ケアリストとの対話は不思議な時間でした。

それは、あたかも未知なる惑星を探索する宇宙飛行士を、宇宙ステーションから支援する管制官のような、深海にどンドン潜ってゆく潜水夫を、離れた潜水艦からサポートする技師のような。そんな醍醐味を、とても地味に味わいました。実際には、思索の散歩の邪魔をしないよう配慮しながら、斜め後ろから話しかけたり、共感の嵐をあえて抑えて、冷静な相槌を装ったり。

横顔を覗きながら何う言葉は、その方ならではの示唆と気づきにあふれていて、それらを如何に新鮮な産地直送で SCT に届けられるかが、NP の腕の見せどころといった感じでした。

———うちはし華英

「わかってほしい」「どう言ったら伝わるだろう」「楽しく聞いてくれたら」。自分のことを誰かに話すとき、僕たちは自然に、伝わりにくそうなことや言葉にしづらいものを省く。コミュニケーションの一つの工夫だけど、結果的に話し慣れている（話がうまい）方ほど、語られなかった「何か」が外に降り積もったままになっている気がした。とはいえ、できることはほとんどなくて、積もった山の傍まで行き、一緒に眺めさせていただいた……くらいの感覚しかない。自分だったら一人でその山を見られないなとも思うが、どこまで助けになったのだろう。それでも時間が経つほどに、こちらがグツと息を吞まざるをえない言葉が立ち上がっていったのも、また確かだと思っている。

———佐々木将史

この3ヶ月、二人のホーム・ケアリストと一緒にさまざまな旅に出かけました。子どもの頃の家に帰ってみたり、中学生のときに読み漁った本を読み返したり、夫の無邪気な言葉に傷ついたり、憧れの南仏に行ってワインを飲んだり、病室で言葉を発しないお父さんと本音でおしゃべりしたり。私の肉体はいつもパソコンの前にはいたけれど、時空を超えた旅をしました。

垣間見たのは他者の人生の断片だけれど、今は私の思い出でもあります。

フィクションにすることで初めて語られる誰かの現実。それを想像することでもう一度現実にするのは、聴く側の役目です。

———田村かのこ

ナラティブパートナーとは、物語を書くためのメンタリングです。そして、それはどのような経験だったかという、一緒にホームビデオを見せてもらっているような経験だったと思います。ホームビデオなので画質もまちまちで、手ブレもひどかったり、一部はなくなってしまっていたり、でもそれが特別な瞬間であることは変わらない。そんなホーム・ケアリストの人が撮影したホームビデオを一緒に見ながら、話をきき、一緒にそれを編集しなおして、別のビデオをつくるような作業だったと思います。願わくば、そうやって作られた新たなナラティブを、一緒に楽しんでいただければ幸いです。

———萩原雄太

ホーム・ケアリストの人生に突如現れた全然知らない人。なぜか親身になって話を聞いている。

竹中香子（さん）が遣わした者たち。聞くしかできない者たち。

画面の向こうで、聞いて、居る。だけなのに関係性が構築され、もはや離れ難いところまで来てしまった。

実際に会ったことも触れたこともないのに、ホーム・ケアリストと確かな何かを交換し合い、少しの間だけ人生を遡って一緒に生きる。

そしてまた、別々に生きる。

私は、サテライト・コール・シアターが終わったらナラティブパートナーではなくなる。

———南野詩恵

## ナラティブパートナー：

### うちはし華英／ Kae UCHIHASHI

文筆家（在野 / 野良 / 在宅）。在野としては日本の雑誌や WEB 媒体に執筆、UA や Verena Brückner、Salyu、とうめいロボ などへ作詞提供。野良としては Francesca Devalier の演劇作品に音楽制作で参加以降、数々のパフォーマンス作品を自作自演。そして在宅では小説『万能薬、としての孤独。』『ホモセンチメンタリス』を執筆、上梓（2022）。また『Picture Book Project #1, #2』では内橋和久と共にライブインスタレーションをプロデュース。2005 年ウィーン移住、2012 年からベルリン在住。創作はいつも家族のケアと二重奏。2024 年よりインディペンデント・ライブスペース ausland（Berlin）の運営 / キュレーションに参加。

### 佐々木将史／ Masashi SASAKI

編集者。保育・幼児教育の出版社に 10 年勤め、2017 年に滋賀へ移住。福祉をベースに、教育、デザイン、人事などの領域でフリーランスとして編集業に携わる。また、ローカルの法人の広報や、経営者の発信の支援なども行う。マガジンハウス「こここ」編集者。インタビューギフト「このひより」共同代表。保育士。4 児（双子 × 双子）の父。

### 田村かのか／ Kanoko TAMURA

アートトランスレーター。アート専門の翻訳・通訳者の活動団体「Art Translators Collective」代表。人と文化と言葉の間に立つ媒介者として翻訳の可能性を探りながら、それぞれの場と内容に応じたクリエイティブな対話のあり方を提案している。札幌国際芸術祭 2020 ではコミュニケーションデザインディレクターとして、展覧会と観客をつなぐ様々な施策を実践。非常勤講師を務める東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻では、アーティストのための英語とコミュニケーションの授業を担当している。

### 萩原雄太／ Yuta HAGHIWARA

演出家、かもめマシーン主宰。「第 13 回 AAF 戯曲賞」、「利賀演劇人コンクール 2016」を受賞。公共と個人の身体との関係を描いた創作を行う。主な作品に、原発事故後、福島の上で行った『福島でゴドーを待ちながら』、日本国憲法をテキストに使った『俺が代』、コロナ禍で開始した『電話演劇シリーズ』など。23 年、Asian Cultural Council New York Fellowship に採択され、ニューヨークに滞在。ジョージタウン大学・Laboratory For Global Performance & Politics 2024-2026 の Global Fellow に採択される。

### 南野詩恵／ Shie MINAMINO

1986 年大阪府出身、京都府在住。劇作家・演出家・衣裳作家。大学在学中より演劇衣裳を製作する、これまでに市原佐都子 /Q、トリコ・A プロデュース、康本雅子作品、瀧口翔 × マルセロ・エヴェリン作品など様々なジャンルの舞台衣裳を製作。2016 年、舞台芸術団体「お寿司」を立ち上げる。京都府を拠点とし、劇作・演出・衣裳を南野詩恵が担当し戯曲、衣裳、対話、多方向からのアプローチを重ね、多層に散る事象を再編集する演出手法を用いる。作品を必要としている人々と共に創作し、必要とすれば誰もが立てる場として舞台を位置付け、生地と文字を駆使して如何なる人と如何なる場でも創作、鑑賞が可能な作品の創造を目指す。